

美術に現れる聖フランシスコ

奨励	清瀬 みさを〔きよせ・みさを〕
奨励者紹介	同志社大学文学部教授
研究テーマ	西洋美術における表現の形と意味の分析

神に従う人は人間への愛を持つべきことを、
あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。
こうして御民に希望を抱かせ、
罪からの回心をお与えになった。
あなたの僕らの敵、死の罰に値する者たちに
これほどの配慮と寛容を示され、
悪から離れる時と方法を授けられたとするなら、
ましてやあなたの子らを裁くにあたっては
どれほど慎重であられたことだろう。
すばらしい約束についての誓いや契約を
あなたは彼らの先祖たちと
交わされたのだから。
あなたはわたしたちを懲らしめられたが、
敵には一万倍もの罰を下された。
わたしたちが裁くとき、あなたの慈しみを思い、
裁かれるとき、憐れみに依り頼むためである。

(知恵の書 12章19―22節)

はじめに

本日 of theチャペル・アワーの奨励に際し、「隣人愛」を統一テーマとして頂戴いたしました。西洋美術史を学んできた私にとって、「隣人愛」という言葉から最初に連想されるのは、「小鳥に説法をする聖フランシスコ」という主題です。折しも、カトリック教会の第266代目ローマ教皇に選出された新教皇が「フランチェスコ（フランシスコ）」を名乗ったニュースも記憶に新しい出来事です。そこで、今回の奨励では、「聖フランシスコ」とはどのような人物なのか、そしてカトリック文化圏の美術に現れる「小鳥に説法をする聖フランシスコ」という主題と作品についてお話ししたいと思います。

教皇「フランシスコ」誕生（＊）

2013年3月13日、ローマのヴァチカン宮殿内システーナ礼拝堂の煙突から白い煙が立ち上りました。イタリア・ルネサンス芸術を代表するミケランジェロ（Michelangelo Buonarroti, 1475-1564）のフレスコ画で有名なローマ教皇専用の礼拝堂ですが、伝統的に教皇選挙（コンクラベ 羅Conclave）が行われる場としても知られます。そこでは、前日から第265代ローマ教皇ベネディクト16世（羅Benedictus XVI, 在位2005年4月―2013年2月末）の退位に伴う教皇選挙が行われておりました。白い煙は新教皇の決定を知らせる合図でした。引き続き、サン・ピエトロ大聖堂（＊＊）正面バルコニーから主席枢機卿が厳かにラテン語で宣言しました。「大いなる喜びを皆様に告げます。教皇が選ばれました。聖なるローマ教会の枢機卿であるホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿です。新教皇はフランシスコを名乗ります（＊＊＊）」。

- ＊「ローマ教皇」（羅Romanus Pontifex, Papa）とはカトリック教会（羅Ecclesia Catholica）の最高指導者であり、マタイによる福音書16章17―19節を根拠に使徒の頭ペトロ（羅Petrus、日本語では「ペテロ」とも言いますが、ここではカトリック中央協議会の表記に従い「ペトロ」の名称を用います）の後継者とみなされています。ややこしいことに、日本では「教皇」として「法王」という二つの表記が見られます。カトリック中央協議会では1981年2月より「ローマ教皇」の名称で統一しています。ところが、東京都千代田区にあるバチカン（原語表記がVaticanですから本文では「ヴァチカン」と表記します）大使館は、「ローマ法王庁大使館」と言います。「法王」というのは、日本と外交関係を結んだときにヴァチカカン市国の首長として日本政府に申請した名称でした。日本政府に登録された外交上の法的用語ですから、国名が変わるといったよほどの事態にならない限り変更はできません。
- ＊サン・ピエトロ大聖堂（伊Basilica di San Pietro in Vaticano）の「サン・ピエトロ」とはイタリア語で「聖ペトロ」を意味し、この聖堂は使徒ペトロの墓を祀るカトリック教会の総本山にあたります。現在の聖堂は16世紀から17世紀半ばにかけて再建された第2代目にあたり、キリスト教の聖堂建築としては世界最大規模を誇ります。
- ＊＊Annuntio vobis gaudium magnum; habemus Papam: Eminentissimum ac Reverendissimum Dominum, Dominum Georgium Marium Sanctae Romanae Ecclesiae Cardinalem Bergoglioqui sibi nomen imposuit Franciscum. カトリック教会の公用語はラテン語であり、新教皇誕生の宣言は、伝統的に決まった文言で行われます。本稿では聖人名の日本語表記はカトリック中央協議会の慣例に従い、ラテン語名を併記します。

この知らせは直ちに「異例づくし」という形容とともに全世界に報道されました。「異例づくし」という意味は、まずこの選挙が前教皇ベネディクト16世の自由意志による生前退位に始まったことでした。生前退位は実に719年ぶりでした。次いで、第266代目の新教皇に選出されたホルヘ・マリオ・ベルゴリオ（Jorge Mario Bergoglio, 1936-）枢機卿がブエノスアイレス生まれのアルゼンチン人、つまりヨーロッパ以外から選出された最初の教皇であったことです。次いで、新教皇がイエズス会（＊）出身であったこと、そして、新教皇は教皇名として「フランシスコ」を名乗ったことでした（＊＊）。

- ＊イエズス会（羅Societas Iesu）とは、スペインのバスク地方出身のイグナチオ・デ・ロヨラ（Ignacio Lopez de Loyola, 1491-1556）が6名の同志と創設し、1540年に教皇によって認可された男子修道会です。宗教改革以降のカトリック教会で「教皇の精鋭部隊」とも称されます。
- ＊＊新教皇はイタリア語で「フランチェスコ」（Francesco）と名乗りましたが、日本では「アッシジの聖フランシスコ」という聖人名が定着しているために、カトリック中央協議会が国内では「フランシスコ」という英語読みで統一することに決定しました。

ローマ教皇は選出されると枢機卿時代までの本名ではなく、新たに教皇名として聖人名を名乗ります。歴代教皇が最も好んだ聖人（＊）の名としては、ヨハネ（羅Johannes）が22名、ベネディクトゥス（羅Benedictus）およびグレゴリウス（羅Gregorius）の16名が挙げられます。新教皇が選んだ「聖フランシスコ」（羅Franciscus）はアメリカの都市名（サン・フランシスコ）でもおなじみですが、カトリック教会における「聖フランシスコ」は複数挙げられます。新教皇の属しているイエズス会3代目の総長はフランシスコ・ボルジア（Francisco de Borja, 1510-1572）、そして日本に初めてキリスト教を伝えた同修道会士のフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier, 1506頃-1552）も、「聖フランシスコ」です。新教皇は、カトリック教会の聖フランシスコのなかで、福音的な慎ましさと、とりわけ貧しい人びとへの配慮を示す意図で「アッシジの聖フランシスコ」（羅Franciscus Assisiensis, 伊Francesco d'Assisi, 1182-1226）に因みこの名を選んだと言われます。「アッシジの聖フランシスコ」は、徹底した無所有と清貧を生涯貫いて托鉢をしながら人間のみならず万物に対する兄弟愛と平和を説いたことで、時代を通じて民衆に愛されてきた聖人です。教皇フランシスコ就任時の「異例づくし」には、歴代教皇に伝統的な赤い靴ではなく黒い靴、金の指輪ではなく銀に金メッキの指輪、金の十字架ではなく鉄の十字架を用いたことも話題になりました。それも新教皇が「アッシジの貧者」と称された聖人の名を選んだ意図に沿うことだと評せられました。

- ＊キリスト教諸派のうちで神と人間の媒介者として聖人崇敬を行っているのは、カトリック教会、聖公会、正教会、東方諸教会、プロテスタントではルター派です。カトリック教会において神の僕（しもべ）が聖人（羅Sanctus 英Saint）に列聖（羅Canonizatio）されるには、教皇庁の公的な審査を経て尊者（羅Venerabilis）から福者（羅Beatus）、聖人という段階を経なければなりません。フィレンツェのサン・マルコ修道院のフレスコ壁画〈受胎告知〉で有名な画家グイード・ディ・ピエトロ（Guido di Pietro, 1390/1395-1455）は、「フラ・アンジェリコ」（Fra Angelico）つまり「天使のような修道士」という通称で知られていますが、1982年に列福されて以降は「ベアート・アンジェリコ」（Beato Angelico 福者アンジェリコ）という呼び名でも親しまれています。また直近の話題としては、2003年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサ（Mother Teresa,

Agnesa/Antigona Gongaia Boiagi, 1910-1997) が列福され、2014年4月27日にはサン・ピエトロ・大聖堂で故ヨハネ・パウロ2世 (Ioannes Paulus II, 在位1978—2005年) および故ヨハネ23世 (Ioannes XXIII, 在位1958—1963年) の2教皇同時の列聖式が盛大に執り行われました。

アッシジの貧者

「アッシジの聖フランシスコ」は、同時代のスペイン人・聖ドミニコ（羅Dominicus Oxomensis, 1170-1221）とともにキリストの生涯を範として徹底した無所有と清貧を旨とする托鉢修道会（*）を創設した、中世の教会改革運動の重要人物と位置付けられています。イタリアではシエナの聖カタリナ（羅Sancta Catharina Senensis, 伊Santa Caterina da Siena, 1347-1380）とともに国の守護聖人として、また、カトリック教会と聖公会（Anglican Church）で聖人として崇敬されています。

＊フランシスコが創設した修道会は、「小さき兄弟会」（羅Ordo Fratrum Minorum）もしくは「フランシスコ会」（羅Ordines Franciscani）と呼ばれ、無所有と清貧を貫き悔悛と神の国を説く托鉢修道会で、どの教会管区にも所属せず、ただローマ教皇にのみ服従することを特色としました。時代の流れのなかで諸派に分化しましたが、原点には男子修道会の第一会（1209年に創設、1223年に認可）、女子修道会の第二会（1212年創設、1253年に認可）、在俗信者の会である第三会（1221年頃創設、1447年に認可）があります。ここでは、以下「フランシスコ会」の名を用います。

ドミニコが1209年に創設した修道会・ドミニコ会（羅Ordo Fratrum Praedicatorum）は1216年に認可され、彼もまた死後まもなく1234年に列聖されています。

ここで聖フランシスコの生涯を簡単にたどっておきましょう。「アッシジの貧者」すなわち聖フランシスコは、1182年、中部ウンブリア地方のアッシジに生まれました。実は「貧者」ではなく、裕福な毛織物商人の長男でした。本名は、ジョヴァンニ・ディ・ピエトロ・ディ・ベルナルドネ（Giovanni di Pietro di Bernardone）でしたが、生前から「フランチェスコ」（Francesco）の名で呼ばれていました。若いころは、ずいぶん享楽的な生活を送る一方で、教皇派と皇帝派との間で勃発したアッシジでの内乱に参戦、1202年の対ペルージャ戦では1年以上の捕虜生活も経験しています。そして、1205年、イタリア南部プーリア地方の戦争に出かける途中で引き返したころから放蕩にふけり、血気も盛んな若者の内面に変化が訪れました。

決定的な転機は、1206年にアッシジ郊外のサン・ダミアノ修道院（Convento di San Damiano）の十字架から「早く行って私の壊れかけた家を建て直しなさい」という神の声を聞いて回心したこと、と伝えられています。彼は、その神の啓示どおりに、独力でそのお堂を修復することから本格的な宗教活動を開始しました。すべての財産を放棄し、徹底した無所有と清貧を貫いて托鉢をしながら、人間のみならず自然から宇宙の天体に至るまで、まさに万物に対する愛と平和を説きました。

フランシスコは、1208年から1209年ごろに托鉢修道会・小さき兄弟団Ordo Fratrum Minorum（フランシスコ会）を創設して本格的な宣教活動を始め、1212年から1214年ごろに遙かに遠い東方への伝道を決意して、シリアを目指すものの途中で挫折します。1219年から1220年には、ついにエジプトに到達しスルタンとの面会にまでこぎつています。無謀とも言える行動力と固い意志、熱い魂の持ち主でした。そして、1224年、イタリア中部のトスカーナとウンブリアの境に位置するラヴェルナ山（Monte della Verna）でキリストに倣い40日間断食をして祈っているときに、手足、脇腹、つまりキリストと同じ箇所にも聖痕を受けた、とされます。フランシスコの聖性を決定づける出来事とみなされました。

フランシスコは1226年に没しましたが、存命中から聖徳性の誉れが高かったために、死後間もない1228年、教皇グレゴリウス9世（Gregorius IX, 在位1227—1241年）によって列聖されました。そして同じ年に、この教皇によりアッシジの町にフランシスコを祀る聖堂の建設が始まり、1253年にサン・フランチェスコ聖堂（Basilica di San Francesco）が献堂されました（図1）。フランシスコ本人は、無所有と清貧を説き、かつその実践を貫いたにもかかわらず、立地の斜面を利用した2階建ての壮麗・壮大な聖堂でした。

この聖堂には、フランシスコの墓があり、清貧の証しであるつぎはぎだらけのフランシスコの僧衣が保存されており、建立当初からカトリック教徒の巡礼地となりました。現代では、日本人のみならず、世界中から訪れる人の絶えないイタリアの一大観光地となっています。1997年にはウンブリア・マルケ地震でサン・フランチェスコ聖堂も堂内の壁面も大きな損傷を被りましたが、2000年には見事に修復され、この聖堂と関連の修道院群がユネスコの世界文化遺産に登録されています。

文学、音楽、映画に現れる聖フランシスコ

聖フランシスコ自身の文筆としては、修道会の会則や訓戒、遺言がありますが、一般に知られるのは「太陽の賛歌」Canticum Fratris Solis (Laudes Creaturarum) という呼び名で愛されてきた神への賛歌です。「神よ、造られたすべてのものによって、私はあなたを賛美します」という言葉で始まるこの詩は、死の直前に、ラテン語ではなく俗語であるウンブリア方言で平易に綴られました。フランシスコは、太陽や月、星から被造物のすべて、果ては死までも「兄弟姉妹」として造り主を讃美しています。『讃美歌』75番の「ものみなござりて」はこの詩をもとにして作られ、今も教会で歌い継がれています。

そして、フランシスコは、聖徳性の誉れが高かったために存命中からすでに伝記が編まれ、その生涯についての情報は、史実、逸話を含め豊富です。清貧に徹し、万物に対する愛と平和を説き続けたフランシスコの生涯は、死後も、現代に至るまで万人を惹きつけてやまず、文学・音楽・映画・美術とさまざまな形で描かれてきました。

伝記については、フランシスコ会は、1262年に同会総長であった神学者・聖ボナヴェントゥラ（Bonaventura, 1221?-1274）が執筆した『アッシジの聖フランシスコ大伝記』Legenda Santi Francisci（宮沢邦子訳 あかし書房 1981年）を聖書のように唯一の正統な伝記と定めました。その後、ジェノヴァ大司教ボラギネ（Jacobus de Voragine, 1230?-1298）が1267年ごろに執筆した中世最大の聖人列伝『黄金伝説』Legenda Aurea（前田敏作・山中知子訳 人文書院 1979—1987年）の第143章は聖フランシスコ伝に捧げられています。また、13世紀末から14世紀初頭にかけて、逸名の作者が執筆した素朴な聖フランシスコと弟子たちの言動録『アッシジの聖フランチェスコ イ・フィオレッティ（小さき花）』I fioretti di san Francesco（大沢章訳 エンデルレ書店 1948年）は、時代の流れを通じて一般に広く愛されてきました。

聖フランシスコは中世の巡礼者を惹きつけただけではなく、その生涯と人となりは、時代や民族、宗教を越えて人びとを魅了してきました。聖フランシスコを題材とする文学、音楽、映画作品が、現代社会においても国を問わずに次々と発表されていることは特筆に値すると言えるでしょう。

文学では、ギリシアのカザンザキス（Nikos Kazantzakis, 1883-1957）が1954年に『アッシジの貧者』Ο φτωχού ληστος Ο Θεού（清水茂訳 みすず書房 1981年）を、アメリカからはジュリアン・グリーン（Julian Green, 1900-1998）が1983年に『アッシジの聖フランチェスコ』God's Fool: The Life of Francis of Assisi（原田武訳 人文書院 1984年）、1992年にはフランス人のクリスチャン・ボバン（Christian Bobin, 1951-）が『いと低きもの』小説・聖フランチェスコの生涯』Le Tres-Bas（中条省平訳 平凡社 1995年）によって、カトリック文学大賞であるデュ・マゴ賞を受賞しています。

音楽分野では、「太陽の賛歌」が讃美歌となったことはすでに触れましたが、ハンガリー出身のフランツ・リスト（Franz Liszt, 1811-1886）は、1863年ごろにピアノ曲の「小鳥に説教するアッシジの聖フランチェスコ」St François d'Assise: la predication aux oiseaux を発表しています。また、1948年には、フランスのフランシス・プーランク（Francis Jean Marcel Poulenc, 1899-1963）が無伴奏男声合唱組曲『アッシジの聖フランシスコの四つの小さな祈り（FP142）』Quatre petites prieres de Saint François d'Assiseを、また同じくフランスのオリヴィエ・メシアン（Olivier-Eugene-Prosper-Charles Messiaen, 1908-1992）は1975年から1983年にかけて三幕のオペラ「アッシジの聖フランチェスコ」Saint François d'Assiseを編み、1983年、パリのオペラ座で小澤征爾の指揮により世界初演が行われ話題となりました。

そして現代的なメディアである映画は、1950年にイタリアのロッセリニ（Roberto Rossellini, 1906-1977）監督がイタリア映画「神の道化師、フランチェスコ」（Francesco Giullare di Dio）を発表しました。この映画は、聖フランシスコとその会士たちとの逸話集『アッシジの聖フランチェスコ イ・フィオレッティ（小さき花）』からの逸話を題材として聖人の半生を描いています。1962年にはハンガリー出身のカーティス（Michael Curtiz, 1888-1962）監督が製作した『剣と十字架』（Francis of Assisi）は、フランシスコの全生涯を扱ったハリウッド映画です。また、1972年に発表されたゼファイリッ（Franco Zeffirelli, 1923-）監督によるアメリカ・イタリア合作映画『ブラザー・サン シスター・ムーン』（英Brother Sun Sister Moon, 伊Fratello sole, sorella luna）はフランシスコの前半生を描いていますが、青春映画として大ヒットしました。このタイトルは「太陽の賛歌」中から取られています。さらに、官能的・耽美的な作風で知られるイタリアの女流映画監督カヴァーニ（Liliana Cavani, 1933-）も、1966年と1989年（イタリアと西ドイツの合作映画「フランチェスコ」Francesco）の2度にわたり聖フランシスコを取り上げています。

美術に現れる聖フランシスコ

アッシジのサン・フランチェスコ聖堂は、観光客が世界中から訪れる現代イタリアの一大観光スポットとなっています。観光客のお目当ての一つは、13世紀の終わりに上堂礼拝堂の壁面に聖フランシスコの生涯を描いたフレスコ壁画連作であると言っても過言ではないでしょう。

キリスト教諸派のなかでも、カトリック教会には、聖書主義を貫くプロテスタント諸派とは異なり、絵画、彫刻、ステンドグラスなどが聖書の内容や、聖人の伝記を目に見える形にして信仰を導いてきた文化的伝統があります。その出発点は、西方キリスト教会が文学文化をもたなかった北方民族に布教する際に「目で読む聖書」として美術が効力を発揮したことになりました。つまり、美術は映画が現れる以前の時代、とりわけ識字率の低い文化圏では、視覚的に強く記憶される強力なメディアであったのです。

聖フランシスコを描いた肖像画も伝記と同様に存命中から存在しますが、死後は、生涯の逸話を描いた物語的な絵画、礼拝の対象となる祭壇画に描かれ、また他の主題（聖会話）などの副次的人物として数限りなく美術に主題を提供してきました。物語的な絵画の出典は、同時代の聖ボナヴェントゥラによる『アッシジの聖フランシスコ大伝記』、そして空想的な逸話に満ちた中世最大のキリスト教文学である『黄金伝説』、『アッシジの聖フランチェスコ イ・フィオレッティ（小さき花）』などでした。ここでは、異なる形式で聖フランシスコを描いた最初期の絵画作品だけを紹介いたします。

聖フランシスコを描いた最古の肖像画（図2）は、ラツィオ地方ローマ県のスピアコに位置するサン・ベネデット修道院（Monastero di San Benedetto）の「聖なる洞窟」（Sacro Speco）にあります。1223年に描かれた大変に素朴な肖像画で、聖痕も示されていません。そして、イタリア中部・ピストイアのペーシャにあるサン・フランチェスコ聖堂（San Francesco）で、1235年にボナヴェントゥラ・ベルリンギエーリ（Bonaventura Berlinghieri, 1210-1287頃）というルッカで活躍した画家が板にテンペラ画（*）で祭壇画（聖フランシスコ）（図3）を描いています。ここでは、金地から堅い表情の聖フランシスコがひととき大きく画面中央にそびえています。聖人は、灰色の修道服をまとい、清貧・服従・貞潔を表す三つの結び目のある腰帯を締めています。左手には聖書を携え、両手・両足には聖痕が表されています。聖人の頭部両脇には半身像の天使が、また体の両側にはその生涯から

貧者への施し、病人の治癒、アレツツォでの悪鬼追放、野の小鳥への説教、熾天使によって聖痕を受ける場面など、六つの逸話が枠の中に描かれています。これは、東方由来のビザンチン様式のアイコン（聖画像）という礼拝図像にあたります。

＊テンペラ画とは、顔料（絵の具）を卵や樹脂などの固着材で練って板や金属などの支持体に描く伝統的な絵画技法です。この技法は、西ヨーロッパでは、15世紀にフランドル地方で完成する亜麻仁油を固着材とする油彩技法に取って代わられますが、東方教会では現在もアイコン制作に用いられている技法です。

そして、聖フランシスコの生涯を描いた物語的な表現については、最初の最も有名な作例が、アッシジのサン・フランチェスコ聖堂上堂壁面のフレスコ壁画（＊）連作（図4）です。これは、聖パナヴェントゥラによる『大伝記』の記述を典拠として、1290年代末に早期ルネサンス絵画を代表するジョット・ディ・ボンドーネ（Giotto di Bondone, 1267頃-1337）が若いころに描いたとされてきましたが、現在では作者問題が議論の対象となっています。

＊フレスコ（fresco）とはイタリア語で「新鮮な」という意味ですが、美術におけるフレスコ画は、漆喰塗りの壁面や天井に描くイタリアでは、伝統的な絵画技法です。予めシノピアという赤色顔料で漆喰下塗り層に描線の下絵を描き、上塗りの漆喰が乾かないうちに顔料を水で溶いて描きます。乾いてしまうと絵の具が漆喰に染み込まなくなります。描き直しができないために、完璧な下絵、構想が必要であり、一日に可能な分量だけの漆喰を塗って湿っているうちに描く筆の速さ、日にちごとにつぎはぎにならないようにしなければなりませんので高度な技術が要求されます。

ともあれ、このフレスコ画連作は、フランシスコの生涯から重要な28場面が選ばれています。北壁はフランシスコの在俗時代の逸話「質朴な男の尊崇をうけるフランシスコ」から始まり、編年順に「外套の授与」、「武具のある宮殿の夢」、「十字架の声を聞く」、「父に所有物を返す」、「教皇インノケンティウスの夢」、「会則の認可」、「焰の車の幻影」、「玉座の幻影」、「アレツツォでの悪鬼追放」、「火の証」、「聖人の法悦」、「グレッツォでの降誕祭」、「泉の奇蹟」の14場面が、南壁には続いて「小鳥への説法」（図5）、「チェラーノの騎士の死」、「教皇ホノリウス3世の前での説教」、「アルルの修道院に現れた聖人の幻影」、「熾天使によって聖痕を受ける聖フランシスコ」（図6）、「聖フランシスコの死」、「修道士アゴスティーノと司教ガイドに現れた聖人の幻影」、「聖痕の確認」、「聖人に別れを告げる聖クララと修道女たち」、「フランシスコの列聖」、「教皇グレゴリウス9世への幻影」、「イレルダから来た男の傷の治癒」、「ベネヴェントの婦人の告白」、「回心した異端者の釈放」の14場面が描かれています。

このフレスコ壁画は、ルネサンスへと繋がるどっしりとした人体造形と立体的な空間表現への試みという表現様式、そして、以降の聖フランシスコ図像の源泉という点で極めて重要な連作と位置づけられています。これら28場面のうちで「小鳥への説法」と「熾天使によって聖痕を受ける」は、聖フランシスコを最も特徴づける場面であると言えます。とりわけ「小鳥への説法」は、前章に挙げた作曲家リストのピアノ曲の主題でもあります。フランシスコが野の小鳥たちに説教を始めると小鳥たちは熱心に聴き入り、フランシスコが許可するまで飛び立とうとしなかった、という叙情的な場面です。万物を兄弟姉妹と呼び、限らない愛を注いだ聖フランシスコの人間性を端的に物語る逸話であるとともに、西ヨーロッパの人びとが外界の自然を認識し始めたと言われるルネサンスより遙かに以前であることを鑑（かんが）みると、実に注目すべき人物です。

聖フランシスコを描いた、一風変わった物語的な絵画作品を紹介しておきましょう。シエナの画家サセッタ（Sassetta, Stefano di Giovanni, 1392-1450）が1437年から1444年に描いた〈神秘の結婚〉（図7）は、フランシスコがシエナに向かう途上に出会った不思議な3人の貴婦人を主題としています。その3人は顔立ちも衣も似通っていましたが、フランシスコに挨拶するといざうことも無く消え去ったというのです。フランシスコは、騎士道や吟遊詩人に倣い、清貧を貴婦人にたとえ、清貧と結婚し清貧に奉仕することをモットーにしました。この作品に描かれた3人の貴婦人は、花嫁である「清貧」に付き従う「純潔」と「服従」の寓意像であり、フランシスコ会の理念を表しています。神秘的な主題にシエナ派独特の簡潔な形態と美しい色彩、幻想的な場面の表現がうまく噛み合っている作品です。

そして、ルネサンス期には「聖会話」sacra conversazioneと呼ばれる、複数の語り合う聖人像を伴う聖母子図像が流行しました。「聖会話」図像の先駆けとして、13世紀末にチマブーエ（Cimabue, 1240-1302頃）の作と伝えられる〈聖会話〉（図8）を挙げておきましょう。アッシジのフランシスコ伝壁画と同じころの作品です。ここでは、玉座に座る聖母子の両肩には天使が、そして左に聖フランシスコが、右に聖ドミニコが対置されています。二人ながらに頭部に光背を頂いていますが、聖フランシスコはうつむき加減に首をかしげ、質素な灰色の修道服に三つの結び目のある帯を締め、裸足で恭順の仕草で腕を交差させています。両手・両足には聖フランシスコの象徴である聖痕が示されています。一方の学究肌であった聖ドミニコは黒白の修道服で、象徴として松明を手にして真っ直ぐに前を見据えています。同じ13世紀に修道会を結成した二人ですが、対になる図像では聖フランシスコが「活動的な修道生活」を、聖ドミニコが「観想的な修道生活」を表します。

聖フランシスコは、文学以上に「目で読む」美術作品によって民衆に親しまれてきました。カトリック文化圏では、存命中から現代に至るまで聖フランシスコを表す絵画、ステンドグラス、彫刻は枚挙にいとまがありません。

おわりに

13世紀に清貧と万物への愛に生き、純粋で情熱的な信仰心をもって活動し続けたこの修道士は、美術のみならず、文学、音楽、映画に描かれて記憶を新たにし、いつの時代も人びとを魅了してきました。太陽を兄弟、月を姉妹と呼び、人間と野の小鳥を分け隔てず、万物に愛を注いだことは、究極の「隣人愛」と言えるのではないのでしょうか。彼の、自然に目を向け、自分と一体に捉える思想はルネサンスに先駆けるものであり、聖フランシスコ図像のうちでも人気の高い〈小鳥への説法〉はその視覚的な証拠とみなされてきました。そして、この聖人は、1980年に、第264代教皇ヨハネ・パウロ2世（羅Johannes Paulus II, 在位1978—2005年）によって「自然環境保護（エコロジー）の聖人」に指定されました。環境破壊と紛争の絶えない今日に就任された新教皇がこの名を選ばれたことは、まことに象徴的で意義深いのではないのでしょうか。

付記

2013年7月の奨励後の2014年4月27日には、ヨハネ・パウロ2世が、ヨハネ23世（羅Johannes XXIII, 在位1958—1963年）とともに列聖されました。

※この冊子への原稿掲載に際し、付記を追記いたしますと共に、＊部分の註釈を加えましたことを最後にお断りいたします。

2013年7月10日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録